

第5回 県立高校教育振興検討会議 議事概要

1 日 時 令和6年2月14日(水) 10:00~11:30

2 場 所 富山県民会館 302号室

3 委員出席者 荒井 公浩 池永 美子 亀谷 卓朗 近藤 智久
品川 祐一郎 高瀬 幸忠 田辺 恵子 鳥海 清司
中村 総一郎 藤重 佳代子 松山 朋朗 水口 勝史

4 会議の要旨

司会が開会を宣した。

議事事項

○ 県立高校教育振興の基本的な方針について(提言)(素案)

事務局から資料に基づき、本会議における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

(会長)

今回は、前回の「県立高校の目指す姿(素案)」に、「県立高校の学科・コースの見直しに関する事」と「様々なタイプの学校・学科等に関する事」の部分を加えた「素案」について、皆様から幅広い観点でいろいろなご意見を伺い、第6回検討会議にて、「県立高校教育振興の基本的な方針について(提言)」の案として示したいと思っていますので、よろしくお願ひします。

まず、資料2の素案1ページから12ページについて、資料3や資料4の意見交換会やフォーラムにおけるご意見を参考に、委員の皆様方のご意見を伺いたいと思います。

(委員)

この検討会議では、中学校卒業予定者数の激減が避けられない中、「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会」の報告書を受けて、「県立高校の目指す姿」として、「学びの質の向上」や「生徒の幅広い選択肢の確保」、「社会のニーズを踏まえた教育体制の整備」を実現するために、学校をどう配置していくかについて考えてきたと認識しています。

これらの目指す姿を実現するためには、生徒数や教員数を確保した一定規模以上の学校が必要だろうと思います。

多様な価値を創造するという事はもちろんですが、「学びの質の向上」や「社会のニーズを踏まえた教育体制の整備」をしていくためにも、1つの学校の中に多様な科目を開設し、生徒の選択の幅を広げることが必要ではないかと思ひます。これは小規模の学校では、実現できないことではないかと思ひます。

提言の中で、「小規模から大規模までバランスよく」と表現されていますが、もし現状の学校数を変えないということであれば、小規模校ばかりになってしまうのではないかと危

惧をします。

職業科については、多くの学校で進学率が高いという現状になっています。そうした点では、1つの学校の中に様々な学科やコースを置くといった方法もあるのではないかと思います。その一方で、高校卒業後、即戦力として働いていくような生徒を育てる学校の場合は、単独校としての設置することはよいのではないかと思います。

また、普通系学科における「学科・コースの見直し」の中で、情報活用やデータサイエンス、グローバルについての話が出ていますが、これらは学科を問わず全てに対して必要ではないかと思うので、これらの学科を設置するというより、全体に広げていくことが必要ではないかと思いました。

(委員)

「学科・コースの見直し」の中の工業科における一括募集について、中学校3年生で学科まで選ぶのは大変厳しいものがあるので、一括募集をし、1年間工業系の学びを経た上で、自分で選べることは大変いい進路選択になるのではないかと歓迎しているところです。

農業科については、即戦力としてすぐに農業現場で働きたいという子もいれば、農業科での学びを大学や専門学校で活かしていきたいという子も増えてきているのではないかと思います。個人的には、農業に興味をもち、さらに知識を深めたいという子どもが増えてほしいと思っており、農業科でも大学進学ができるということを中学生にアピールしてもらえると、さらに農業に興味をもち、これからの農業を考えていく子どもが増えるのではないかと考えています。

定時制・通信制についてですが、小学校でも中学校でも、不登校が喫緊の課題となっています。小学生で増えている傾向からすると、今後ますます不登校生徒が増えることが考えられるため、どのように子どもたちに学びの保障をしていくかということが現場の課題になっています。現在、小中学校において、子どもたちに学びの機会を与えられるように頑張っているところですが、高校へ行っても学びが継続され、高校卒業ができるといった体制を作っていただきたいと思っています。

定時制・通信制については、高校からでも学び直しができるといったことが記載されているので、大変ありがたく思っています。そういったことを中学校にもっとPRしていただき、定時制における取組みをもっと保護者や中学校側に伝えていただける機会があればありがたいと思います。

(委員)

普通系学科の「学科・コースの見直し」の中に、「地域課題等をテーマとした探究活動を行うことができる」という表現があります。私もこれには賛成なのですが、実際に高校生たちはどのような分野をテーマとして設定するのが気になっています。例えば、伝統産業や医療・福祉、観光、ボランティア、商業などがあるのかもしれませんが。こうしたテーマ設定によって、将来の多様な進路実現を図ることができるのではないかと思います。

現在、医療人材が求められていることは地域課題の1つかと思いますが、例えば、普通系学科であっても、早い時期から医療福祉系のことが学びの課程にあることで、そうした分野に興味や関心をもち、看護や助産、放射線医療などに繋がる医学部への進学を目指す

可能性が出てくるのではないかと思います。そういった分野へ目が向くような学びの環境を提供していくことがあっていいのではないのでしょうか。

各地域に全ての学科を設けるのは、なかなか難しいのではないかと考えていますが、どの地域出身の高校生であっても近くの高校において幅広い進路の選択肢をもてるような体制があることが望ましいのではないかと考えています。看護科を卒業し、専攻科を経て就職する方のように、中学校卒業段階で進路を決めている子どもがいる一方、進路を決めかねている子どももいるので、高校3年間の探究活動を通して様々な道を選択できるようになればいいと思います。

各地域・市町村においては、それぞれに伝統産業や文化財などがあるため、探究活動を実施するにあたり、そうしたフィールドを提供できる可能性があると思います。こうしたことを念頭に置き、今後、具体的な教育課程を編成していただければ、素案に記載されていることの実現にも繋がるのではないのでしょうか。

年明けから、土木・建築系技師の存在が非常に重要だと実感しています。工学系では機械、電気といった分野などはもちろん重要ですが、市町村との意見交換会やフォーラムにおいて、地域によっては土木系の学科・コースの設置を求める声があり、そうしたご意見は当然のことだろうと考えています。そうした学科をすべての地域に設置することは難しいかもしれませんが、そうしたところへ目を向けられるようなことを教育活動に組み込んでいき、興味をもった生徒が進路先として、土木や建築を選ぶようになればいいのではないかと思います。こうしたことにもフィールドワークが必要ということであれば、これまでも民間企業の方のご協力はありますが、公共団体や市町村の中にも関連部署があるので、そうしたところとの連携による実習や体験を重ね、学びを深めていけるような、地域・市町村・民間が相まった学習活動が展開されるのも富山県らしいあり方ではないかと思います。

(会長)

地域社会のニーズに応えるために多様な学びや進路選択ができる新たな普通科について考えられないかということは、私も同感です。

(委員)

社会に出ると、普段から様々な場面で情報の活用や身近なデータの分析を行います。今後もそれがますます重要になります。情報活用やデータサイエンスについては、職業系学科でも必要だと思うので、普通科だけに記載されるものではないと思います。職業系学科の生徒には、社会に出るのが早い方も多いため、情報活用とデータサイエンスは普通系、職業系を問わず、ぜひカリキュラムに組み込んでいただきたいと思います。

また、その授業を誰が担うかについては、高校と大学との連携が今後重要なので、例えば富山県立大学や富山大学などによるオンライン授業（情報活用とデータサイエンス）なども取り入れていくべきではないかと思います。現在、大学と社会の間にもあまりにもアイドリングがない状態（オーバーラップしない線引き）があります。高校と大学についても同じなので、普職問わず、大学の先生からのオンライン授業や出張授業などを履修できるように工夫していただきたいと思います。

さらに、大学によっては、高校生が馴染みやすいキャラクターを制作し、学内のいろいろな案内やQ&Aなどをそのキャラクターが担当しています。中学生や高校生が興味を示す方法を考えることも非常に重要だと思うので、ぜひ大学との連携をお願いしたいと思います。

もう一つは定時制・通信制についてです。今回の検討では、「県立高校の目指す姿」として、ウェルビーイングの向上を掲げています。ウェルビーイングは、2020年代後半以降は、SDGsに代わるものと言われています。つまり、先行指標はSDGsであり、その4番目の指標「質の高い教育をみんなに」が前提です。この定時制・通信制こそが、多様な生徒に対応した学び直しや再チャレンジの機会をつくる上で非常に重要であり、登校が難しい生徒や時間的制約がある社会人の学びといった一部課題の解決策にもなると思います。在宅オンラインによる履修などもう一步踏み込んだことも明記していただくのではないかと思います。

(委員)

検討会議を振り返ってみると、当初ショックだったのが、子どもの数が10年近く経つと約3割減少することでした。このショックな事実に対して私たちが対処するには、相当な意識改革や発想の転換が必要だと思います。

そういった意味では、提示された「県立高校の目指す姿」に掲げられた方針は、大変素晴らしいものにまとまってきていると思います。特に「学びの質の向上」、「幅広い選択肢の確保」、「社会のニーズを踏まえた教育体制の整備」という3つの視点は、今後大切なことだと思っています。それによって、子どもが主役になり、子どもにとっての教育改革こそが中心議題であるという主旨がはっきりと示されているのではないかと思います。

学科・コースの見直しについては、現在の学科・コースが複雑なものになっているため、これからは細分化してきたものを統合する方向に舵を切っていく必要があるのではないかと思います。これまで様々な意見が出ているように、子どもたちがどういった勉強をするのか見えにくくなっていると思うからです。もう少し枠組みを統合することによって、イメージしやすくする必要があります。

また、大変な情報化時代を迎えており、私たちよりも子どもたちの方が場合によっては、たくさんの情報を集めていることがあると思います。高校教育においても、専門性が私たちの時代以上に期待されていることは間違いないのではないかと思います。そうしたことから、今回提示された普通系学科については、データサイエンスやグローバルなどに対応していこうとしており、これも大変いい方向性だと思いました。

工業科については、デジタル化だけではなく、デザインを取り入れていこうとしており、これについてもこれから期待されることではないかと思います。また、1月の能登半島地震によって、防災に対する考え方に子どもたちは共感し、そのことを学びたがっているのではないかと期待をもつようになりました。

商業科については、マーケティングが重要と言われており、学習内容がさらに高度化していこうと思っています。観光が全世界的に大きな産業になっているので、商業科における学習の中に、観光が取り入れられることもあるのではないかと思います。そうした視点では、普通科と商業科を併用するのは、少し時代遅れのような気がしています。

農業科と水産科については、大胆な意見かもしれませんが、FOOD（フード）に関わることを勉強していくというような意味で農業科と水産科を統合し、一緒の括りにした学校をつくることができないかと思います。富山県は、海と農業の場所が隣接し、コンパクトになっているので、一体化を実現した特徴ある学科になりうるのではないかと思います。

同様に、家庭科と看護科と福祉科も細分化しすぎているので、生活分野という括りとして一体化することができないかと思います。高齢化に向けて、家庭、看護、福祉に関わらず同じことが期待されています。今後、同じことを勉強することになるのではないかという思いと、身内が高齢化する中であって、子や孫である自分が役に立っていききたい、手助けをしていききたいということを真剣に考えている子どもが増えているのではないかという思いがあります。そうしたことを学ぶことができるウェルビーイングの土壌のようなものを高校課程で設けることができると、大変ユニークになるのではないかと期待します。

富山県は全国から見ても東西南北の距離が思ったほどない、非常にコンパクトな県なので、まとまりやすいのではないかと思います。富山県だからできるコンパクトな教育体系が実現できると、約3割の子どもが減少しても、質が高く、子どもたちが選択しやすく、様々なニーズに応えることができる教育をユニークに実現させることができるのではないかと考えました。

（委員）

富山県は県立高校志向が非常に高く、地域性があり、長男長女が家を継いだり、家の仕事に関わっていたりするような状況がたくさんあるように思います。

知り合いのお医者さんから「私は衛生看護科を卒業した看護師さんたちに育ててもらいました」と伺ったことがあります。また、私の会社は男性中心の職業だと思っていましたが、工業科を卒業した女子生徒が、女子ならではの細やかさを生かしながら、男性社員と遜色なく10年以上、仕事をしてくれています。出身校や性別ということではなく、それぞれの子どもの資質や育った環境などが大切なのではないかと思っています。

地域性があり、各地域に学校があることはとてもいいことだとは思いますが、小学校や中学校ではないので、多少遠くても自分たちで通うことはとても大切だと思っています。私が卒業した学校にも、五箇山から通っていた子どもがいました。春から秋にかけては通学しますが、冬だけは下宿をするといった判断をしていました。また、知り合いのお子さんが遠い学校に進学したことを聞き、その理由を尋ねたことがあります。本人が栄養士になりたいという理由でその学校に行きたいと言ったので進学させたとのことでした。14歳、15歳でもそういった判断をするのかと思ったので、地域性なども踏まえ、子どもの判断を大切にしたいと思います。しかし、子どもの判断を後押しするのは保護者だと思うので、保護者への情報がたくさんあればいいと思います。

（委員）

目指す姿やビジョンが大事ということについては、本検討会議でも、富山、高岡会場で行われたフォーラムでも意見が出ていました。生きる力、幅広い選択肢、社会のニーズを実現し、最終的にウェルビーイングを目指すために、今の議論があると思っています。

「令和の魅力と活力ある県立高校づくりに向けた6つの方向性」の「IV. グローバルに

活躍する生徒の育成の推進」について、前回の会議において国際バカロレアの議論もありましたが、それほどバカロレアの議論は盛り上がりおらず、私たちはグローバル人材を育成しようとしているのではないのではという気がしています。今議論しているのは、グローバルな視点をもったチェンジメーカーの育成を目指しているのではないかと考えています。「グローバル」なのか「グローバル」なのかを考える必要がありますが、「グローバルな視点をもったチェンジメーカーの育成」という形にして、「それぞれの人生のウェルビーイングを求めていく」とすれば、いろいろなことが結びついてくるのではないかと思います。

学科・コースの見直しについては、それぞれ詳細に記載されているので、この通りでよいと思います。ただ、例えば普通系学科に「情報活用」、「英会話力」、「大学との連携」、「多様な科目」、「地域課題」とあり、それぞれこの通りだと思いますが、実際、高校の現場では、生徒も先生も保護者も大学入試が目標や目的になってしまっている現実があるのではないかと思います。保護者も先生も、それ以外の価値に気付かせてあげることが大事だと思っているので、どの学科においても「どのように生きるか」や「あなたにとっての幸せとは何か」ということを考えた上で、それぞれの学科の学びがあるのではないかと考えています。すべての学科において、保護者も先生も、将来ビジョンから現在の学びをどうするかということを読み取る必要がだんだん出てきていると思います。そうしたことから、経営者の方々や看護師、学校の先生など多岐にわたる方々にもっと学校に足を運んでいただき、中学校でも高校でも「幸せ」について感じるができる機会を設けることが大事ではないかと思います。

学科によって、工業科であれば、土木・建築系の大事さやデザインの大事さなどを学ぶことができる場所、商業科であれば、経営者の近道になる、公認会計士や税理士になることができる場所といったような特色ある学科があることも大切だと思います。

(会長)

それでは、素案の13ページ以降の「3. 様々なタイプの学校・学科等に関する事」や「4. 県立高校再編の必要性」について、意見交換に移ります。

(委員)

学校規模について、素案には「様々な学校規模」という表現があり、中～大規模校だけではなく、小規模校についても必要性が盛り込まれているのは、喜ばしいことだと思います。中規模校にも小規模校にも、それぞれメリットがあると感じており、通学している生徒にとって、それぞれの環境がマッチしていることが大事だと思っています。

また、生徒が一定の通学時間内の高校から多様な選択ができるように学校をバランスよく配置することについては、私立高校では対応しきれない部分があると感じており、公教育として、通学格差が極力生まれないように配慮することも大事だと思います。

再編する場合の話になりますが、近年は募集定員に満たない県立高校も増えている実態があるので、例えば、何年か続けて定員に満たない場合は再編の対象にするといったようにするとわかりやすく、納得感が得られるのではないかと思います。

学科・コースの見直しについて、県立高校に専門的な学科がこれだけたくさんあるとい

うのは大きな魅力であり、私立高校では現実的に対応しきれない部分だと思います。様々な学科があることを強みにするよい機会になると思います。

素案には、様々な提案があり、向かうべき方向性が示されていますが、実際に授業を行うのは現場です。現場の教員が主体的に新しい取組みをどのように行っていくかということがなければ、絵に描いた餅になるのではないかと思います。この提言について、それぞれの学校で、例えば教員中心のワーキングチームなどを作り、現場の先生が実際に考えて実行するような仕組みをつくることも必要になるのではないかと思います。

また、例えば、職業科の中に、「起業を視野に入れた取組み」と記載がありますが、先生の中で、経済界での経験をもっている方は少ないと思います。そうすると、なかなか教員だけでは対応できない部分もあるので、外部人材に関わってもらう機会を増やさなければ、これらの学科・コースの魅力化は難しいのではないかと思います。

(委員)

「3. 様々なタイプの学校・学科等に関する事」について、それぞれにメリットがあり教育的効果もあると考えていますが、その一方で、新たな取組みには、教員配置や教育課程に対応した施設設備の充実がどうしても必要です。「(2)国際バカロレア認定校等」には「人材の確保」や「予算の創出」と記載されています。また、「(4)外国人生徒に係る特別入学枠」においても、新たに配置が必要な教員や外部人材の確保、その人件費、さらには施設設備の整備にかかる予算が必要で、こうしたものを確保しない限りは実現が難しいだろうと考えています。そうすると、新たなタイプの学校・学科の設置については、県教育委員会だけで決めることはできず、他の関係部局や各種団体とも十分に協議をしていく必要があると思います。様々なタイプの学校・学科を設置することになった場合は、現在設置されている県立高校のどこかに設置することになると思うので、学校現場との連携をとることも必要だと思います。こうした点を踏まえれば、今後とも慎重に考えていくことが必要だと思います。

また、「4. 県立高校再編の必要性」については、「1. 県立高校の目指す姿」と大きく繋がる場所があると思います。意見交換会やフォーラムにおける意見を見聞きしてきましたが、例えば、地域中心、卒業生や同窓生中心、保護者中心、教員中心といったようにそれぞれの立場で思いや考えを述べていらっしやいました。どの意見もその通りだと思っています。これまで、この検討会議で議論してきましたが、そうした意見を踏まえた上で、子どもを中心とした視点に立って進めていくことが大事だと思います。

今後、子どもが激減していく中で、このままでは子どもたちは画一的な規模の学校から選択せざるを得ないことが見えているので、子どもたちのためにも様々なタイプの学校や、それなりの規模のある学校から小規模の学校まで整えられるように進めていくことが大人の務めであると思います。県立高校再編の必要性については、提示された素案の通り進めていけばいいと考えています。

(委員)

普通系学科や農業科では、AIやデータサイエンスといった情報に関することが記載されていますが、全学科でできるのではないかと考えています。

昨年末、文部科学省から「高等学校DX加速化推進事業」の方針が出されました。その中には、高校段階においてデジタルを活用した探究的な内容の学びの実施を目指すということが記載されています。それを実現するためには、オンラインの授業やオンデマンドで授業が受けられるといった環境整備が大切ですが、まずは富山県の全学校において、通信ネットワークの環境を十分に整備することが必要ではないかと感じています。例えばCBT化によって学びのレベルがどうなっているかを把握することや、生成AIを用いた授業によって「探究」に対して多様な学びや新しい学びを取り入れていくことで、「未来を拓く学びの場」に繋がるのではないかと思います。

これまで業界では、集合研修や活字から学ぶことが一般的でしたが、現在は動画で学ぶことが一般化してきており、これからはAIで学ぶ時代に変化することが予想されています。まずは、動画で学ぶことができる環境を提供していただきたいと思います。そして、こうしたことを実現するためには、大学や民間企業と連携し、講師などの人材を確保していくことが必要だと思うので、情報化やDX化にアプローチできるような環境整備をお願いしたいと思います。

(委員)

「様々な学科・コースや規模の学校をバランスよく配置することが望ましい」ということは、その通りだと思います。多様な選択肢ということについては、卒業までに特定の資格取得を目指すといった専門性まで求めると、全地域に学校を配置することは、教員数や設備などの関係から、難しいのではないかと思います。

しかし、資格取得までは求めないが、興味のある生徒には、「総合的な探究の時間」を活用することで学びの機会を与えることができればいいのではないかと思います。

2023年3月31日の文部科学省の発表によれば、大学入試全体で、学校推薦型選抜や総合型選抜の割合が半数を超えているとのことでした。逆に半数を切ったのは、一般入試でした。この学校推薦型選抜や総合型選抜では、教科書を中心とした従来の授業ではなくて、興味をもったことに対して学びをどのように深めて実践してきたかが問われることとなります。

学校がこうしたことに対応するためには、「総合的な探究の時間」をどう充実させるかが課題になると言えます。しかし、多種多様な子どもたちの学びたいという欲求に対応するためには、教員の負担が大きなネックになると思います。そうしたことから、市町村やPTA、地域、企業の理解や協力が必要になると思います。それによって、学校の特色化や魅力化が図れるのではないのでしょうか。

中高一貫教育校について、すぐに中高一貫としなくても、例えば一貫性のあるカリキュラムを作り、中学校からその地域のことを学び、さらに学びを深めるために地域の高校に進学することも可能ではないかと思います。それによって、高校の魅力化や特色化も図れるのではないのでしょうか。

(委員)

中高一貫教育校については、現在、富山県を含めた2県だけ設置されていないということですが、現在設置されている学校は、大学進学のために教育を詰めて、受験のための勉

強をするというような中高一貫教育校が多いと思っています。

そうではなく、地域に視点を置いた中高一貫教育校を設置することが一つの方法になると思います。そのためには、市町村教育委員会や首長さんを含めた関係機関と協議しながら、今後も検討していけばいいのではないかと思います。

国際バカロレア認定校については、資格を取るために、先鋭した子どもを養成していくという点ではいいと思いますが、現時点ではこの資格を取るための足かせが大きい気がするため、全体に広めていくのが難しいと思います。前回の検討会議でもあったように、他の方法でも、国際化やグローバル化に対応した教育内容を強めていけるのであれば、まずそこから進めてはどうかと思いました。

全国募集については、需要がどうなのかが全くわからないので、要望はあるとのことですが、募集をしても誰も来ないということになると作った意味がなくなるので、需要を調べる必要があるのではないかと思います。

外国人生徒に係る特別入学枠については、社会情勢から考えると進めていかなければならないものだと思います。教員やコーディネーターの確保など、様々な難しい面があります。特に教員を養成することは時間もかかるので難しいことだとは思いますが、必ず進めていかなければならないと思います。

「4. 県立高校再編の必要性」については、現在の1学級の生徒数や教員配置数が変わらない中で、「県立高校の目指す姿」を実現するためには、提言にある「1学年4学級未満又は160人未満」という内容が良いのではないかと思います。一方で、少人数学級が実現できれば、その時に再編の方向性を考え直す必要があると思います。少人数学級を実現するために、国に対して働きかけるということは重要なことだと思いますが、本当にそれが必要なのであれば、県が独自に動いていく必要があると思います。そのためには、人と予算が必ず必要になるので、予算の編成権をもつ県が主導となり、このことを考えてもらうという視点もあるのではないかと思います。

(委員)

外国籍の子どもたちは本当に増えています。提言に「外国人生徒に係る特別入学枠」を記載していただいたことは大変嬉しいです。こうした子どもたちには力があり、「富山で働きたい」、「富山に住みたい」と思っている方もたくさんいます。

人材確保の必要性について話がありましたが、小中学校では人材が揃っていても指導している現状があります。与えられた教員で対応するしかないのです。ただ、限界もあるので、外国人生徒に対応できるような資格を持った方の発掘や人材確保などを県の方で行っていただくと大変ありがたいと思います。

(委員)

提言の概要版については、端的にわかりやすくまとめられていると感じました。

農業科において「中学生が学んでみたいと思える教育内容」と記載されていることが気になりました。選択する時は中学生ですが、学ぶときは高校生なので、水産科と並べて「テクノロジーを生かした農業教育」などとするのはどうでしょうか。

魅力と活力ある高校づくりに欠かせないのが、それを支える質の高い教職員の確保です。

「目指す姿」の3つ目にある「教育体制の整備」や、「令和の魅力と活力ある県立高校づくりに向けた6つの方向性」の「V. 魅力と活力ある学校づくりを推進するための教育環境の整備」にも含まれると思いますが、時代や社会、地域の要請に応える高校づくりを具現化していく中心となるのは、教職員です。新たな学びや多様な学び、未来を拓く学びのためには、教職員への研修を充実し、資質向上を図ることが何より重要だと思います。

学科・コースの見直しについては、検討会議の委員の様々なご意見が丁寧に反映されていると感じました。その中の「魅力発信等」には、PR方法の検討について記載されていますが、これまでも「進路のしおり」という冊子を中学2年生全員に配布していただいています。中学校では、進路学習の大切な資料となっています。

今後は「ホームページやSNSを活用した情報発信を強化する」とあったので、その方向でいいと思いますが、オープンハイスクールといった高校での学びを直接体験できる機会の拡大など、進路選択のために必要な情報がより伝わるようお願いしたいと思います。

(委員)

生徒の幅広い選択肢を確保するため、学科構成や学校規模の多様性を維持し、既存の学科やコースについても、社会や生徒のニーズに応じて見直すとされるなど、多くの取組みを盛り込んだ提言に仕上がったと思います。どの施策についても、丁寧な説明と情報発信が必要だと思います。

特に高校再編や様々なタイプの学校・学科の新設、学科・コースの見直しを検討するにあたっては、関係地域に住む方々や、小中学校と他の教育機関、多くの企業などの理解と協力が不可欠となります。その際、提言の最初に掲げられている「魅力ある高校教育を通じた「ウェルビーイング」の向上 ～学びたい、学んでよかったと思える高校づくり～」というスローガンと3つの「目指す姿」は、生徒ファーストの立場に立った富山県が目指す教育を指すものと思うので、常にこの言葉を踏まえた形で、それぞれの施策を進めていただければと思います。

今後は、少子化と並行して、生産年齢人口も急激に減っていくことが予想されています。現状を維持するだけでも、今の体制や手法のままでは、現場を担う教職員やそれをサポートする方々の負担は増えていくはずで、さらに、現状に加えて多様なあり方と可能性を加味した様々な施策を進めていくとなると、リソース不足は必至になります。

現状の整理や見直しに加え、IoTやDXといったデジタル技術も取り入れていくとともに、専門性が求められる部分は、分業と連携を進めるなど、生徒が生き生きと学びに向かうことのできる環境を作っていただきたいと思います。

(委員)

各委員の皆様には貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。それでは、最後に教育長からご発言をお願いします。

5 教育長挨拶

(教育長)

委員の皆様には、お忙しい中、本日の検討会議にご出席いただき、また非常に熱心にご

議論いただき、ご意見を多数いただいたこと本当に感謝申し上げます。これまで5回の検討を重ねてきていただいたことで、今回、素案という形でお示しすることができました。感謝申し上げます。

理念やビジョンについては、市町村との意見交換会やフォーラムでのご意見を伺っていても、大方ご理解をいただいているのではないかと考えており、大変ありがたく思っています。

データサイエンスやグローバルといったことが、普通科などにしか出てこない、学科・コースを作るといったことだけではなく、学科を問わず必要というご指摘は、その通りだと思います。職業科においても必要ということはその通りで、この分野について深く学びたいという生徒のニーズがあると思うので、コースの設置などについて考えていくことができればよいと思います。カリキュラム的にすべての生徒に必要なというのは、その通りだと思うので、少し記載を充実させたいと思います。

また、オンラインの活用というご指摘もありました。現場でも、現在、大学や海外から話を聞くということも行われています。活用が進んできていると思いますが、オンライン授業を全日制高校の日常の授業で実施することについては、現在の仕組み上、例えば、受信側にも教員を配置しなければいけないといったことや、取得できる単位に上限があるといったことなど一定のルールがあります。実施する場合は、その範囲においてということになりますが、国においてはルール見直しの検討が行われているようなので、確認しながら充実させていければと思っています。

また、地域に多様な課題やテーマがあり、例えば医療や福祉、土木、防災など、いろいろなことがあるので、学科問わず普通科でもそういったことを探究的な学びなどで深めていくことができればよいというご指摘もその通りだと思います。2月3日に富山大学で、探究フォーラムという行事を行いました。大変多くの高校生が探究的な学びの成果を発表してくれました。例えば地域の交通の問題や防災のことについての発表もありました。いろいろなテーマを取り上げてくれています。ただ、ご指摘があったように、それをすべて教員がこれからも担いながら充実させていくのは非常に厳しい部分もあると思っています。大学や企業の皆様のご協力をいただいた上で取組みをもっと進めなければいけないと思っています。現在もご協力いただいているわけですが、さらに協力していただきやすいような仕組みづくりも考えていくことができればと思います。

学科間の連携といったご指摘もありました。学科の統合ということになると、どこまでできるのかという問題がありますが、学科間の学びの連携を深めていくという方向については、ご指摘の通りと思います。

理念的なことはこれでよいとしても、少子化の中でこうした手厚い教育や幅広い選択肢をどのように実現していくかということになると、手厚い教員配置が求められたり、施設設備などの予算の問題があったりするというのもその通りです。こうしたことは、知事部局ともよく話をしながら進めていかなければいけないと思います。また、それぞれの学校現場の意見も十分に聞きながら進めていきたいと思っています。

そして、規模や数ありきではないかといったご指摘をこれまでいろいろなところでいただきました。これからの非常に厳しい少子化の中では、現状の学校を維持すると大部分の学校が小規模化してしまい、子どもの数が3割減少するということは、例えば現在3学級

のところは2学級に、6学級のところが4学級ぐらいになるということが考えられる厳しい状況です。規模や数ありきではなく、素案に掲げたような理念を実現するためには、今後バラエティに富んだ選択肢を生徒に提示できなくなるという厳しい状況の中で、一度は規模や人数について真剣に、度外視せずに向き合って考えなければいけないということで、こうした基準についての議論になったと思っています。

今回、第5回を開催しましたが、この後、2月の県議会もあり、いろいろなご意見が出てくると思います。本日のご意見や県議会などのご意見も踏まえ、次回は、この基本的な方針について提言（案）として取りまとめたものを提示し、できればその場で取りまとめをして、来年度以降の総合教育会議での議論へと繋げていきたいと思っています。

委員の皆様には、今後ともご支援、ご指導をお願いしたいと思っています。どうもありがとうございました。

（会長）

子どもファーストの観点から、理念やビジョンにある「教育の質の向上」、「多様な選択肢の確保」のために一定の高校規模は必要ではないかと、これまでの議論を踏まえて思います。その上で、地域社会のニーズや生徒さんの通学事情等に応えるために、できるだけ地域バランス等も配慮した配置に再編案がまとめられることが望ましいのではないかと考えます。

また、多様な学びや進路選択が可能となる新たな普通科や、総合学習ができる新たな普通科といったものを今後、設置していく必要があるのではないかと考えます。また、そういった学校や進学に重点を置いた学校、地域性や特色のある学びができる学校を各学区にバランスよく配置できることが望ましいのではないかと考えました。

今後、働き手が不足する中で、外国籍のお子さんがさらに増えていきます。経済界としては、そのような方々の力を活用する必要があると思っています。いろいろな制約があるかとは思いますが、そういった方々の学びの場も、要望として、ご検討いただければと思います。

そして、各会場のフォーラム等に参加いただきましたが、参加いただいた方々が熱い思いでご意見を仰っており、どのご意見もそれぞれの立場から大変理解できるものだったと思っています。いろいろと物事を議論する際は、総論と各論、また全体最適と部分最適ということがあります。そういった各論や部分最適のご意見をしっかり踏まえ、「再編検討の方向性」のただし書きにもあるように、実際のことをしっかり考慮した上で、全体の方向性は一定の基準をもった上で、しっかりと進めていくべきではないかと考えます。

次回の第6回検討会議では、県立高校の教育振興に関する基本的な方針（提言）について、本日いただいたご意見を踏まえて、事務局の方で修正していただき、最終案をお示しし、協議いただければと思いますので、よろしく願いいたします。

議事が終了したので、会長が終了を宣し、進行を事務局へ戻した。

6 閉会

11時30分、司会が閉会を宣した。